



## 手を繋いだ時の温かみ

南帷子小学校長 堀田 誠

「ソーシャルディスタンス」という言葉は、コロナが大流行したことによって、誰もが使うようになった言葉です。改めてこの言葉の意味を調べてみると、Social(社会) Distance(距離)という英単語から成り、感染症の流行を避けるために社会的な距離を保つことを目的として叫ばれた言葉です。

類義語に「フィジカルディスタンシング」があります。ソーシャルディスタンスは社会的な距離を置くという意味合いがあり、人と人との関係性を社会的に断絶する意味合いで解釈できてしまうことから、世界保健機関(WHO)が「フィジカルディスタンス」という言葉を提示しました。対義語としては、「パーソナルスペース」があります。意味は、他人に近づかれると不快だと感じる距離のことです。ソーシャルディスタンスは普段不快とは感じないレベルの距離感以上に離れなければならないという意味がありますが、パーソナルスペースはかなり近い距離感であると言えます。

さて、学校は人と人との関わりを通して、社会性を学ぶ場でもあります。授業で自分とは違う考えを知ることで、物事の捉え方が広がります。人から優しくされたり、認められたりすると心が豊かになります。人のために頑張ると生きていく上でのエネルギーにもなります。時には友達とぶつかり合うこともあります。その経験が将来生きていく上での糧となることもあります。学校という社会の中で、他者とより良く生きていくための距離を学んでいくことが、まさにソーシャルディスタンスなのかもしれません。コロナ禍では、ソーシャルディスタンスという言葉の誤った使い方をしてしまっていたのだなあと反省です。

ところで、学校では微笑ましい光景が見られます。青空、昼休みの時間に、6年生の児童が1年生と一緒に遊んでいる姿です。手をつないで歩く姿、1年生を抱っこしている姿が見られます。お兄さん、お姉さんに優しくしてもらえる1年生の児童の表情、そして、1年生の世話をする6年生の穏やかな表情から何とも言えない温かさを感じます。そういえば、コロナ禍では、手をつなぐこと、抱っこすることも「ダメなこと」とされていました。感染症対策として、フィジカルディスタンシングをとっていましたが、「手と手を繋いだ時の温かみ」「繋がった時の安堵感」というメンタル的な距離も同時にどこかに置き去りにされていたのかもしれない。当時は、それよりもコロナと言う恐怖があったので、仕方ありませんでした。

今日も、登校時に1年生と手を繋いで、児童玄関まで連れてくる6年生の姿がありました。きっと5年前、自分たちも手を繋いでもらった温かみを思い出したのでしょう。



職員玄関の皐は満開

